弓廿度有之、御所作無之、

〔海人藻芥〕諸門跡ノ藝ハ、詩歌茶香ノ會、春ハ雀小弓也、然シテ近代春蓮院尊道親王、理性院僧正宗助、圍碁會張行有之云々不可有事也、東寺ノ門徒殊可斟酌者也、

〔雍州府志七土産〕楊弓〇中略　近世雀小弓亦玩之

〔嬉遊笑覽四雜伎〕雀小弓は雍州府志に、近世亦翫之といひしは、天和年間の事にて、其後すたれたるにや聞えず、

〔書言字考節用集七器財〕破魔弓年始小兒遊戯具

〔日本歳時記一正月〕年の始に童子の破魔弓として射るは、治れる世にも武を忘れざる意なるべし、但むかしは射禮とて、正月に内裏にて弓射る事のありしなり、孝德天皇の御宇に、大内にて正月に弓をいさしむといふ事、古き文にも見えたり、かゝる事を下にうけて、いにしへは年のはじめに、年長せる人も弓を射たりしにや、文獻通考日本の部にも、毎至正月一日必射戯すと記せり、

〔四季草一射藝〕はま弓の事

正月男子のもてあそびに、はま弓射る事は、邪鬼を退治するの表相なり、はまとは破魔と書て、魔を破るの義なりといふ說あり、さも有べきやうに聞ゆれども、はまの正說にあらず、はま弓のたはふれ、昔は京にも何方にも有し事なるべけれども、今は絶て、たゞその弓矢を賣り、童のもてあそび物にするのみなり、されども遠國には、其たはふれ今に殘れり、土佐國の人の物語に、土佐國畑といふ所の山中の民家にて、正月に幼童はま弓を射る、的は藁繩を以て作る、其形圓座の如し、徑り壹尺ばかり、其中に徑二三寸の穴あり、是を名付てはまといふ、射手弓矢を持て一列に立並て待時、一方よりかのはまを轉し走らしむるを、各射るなり、はまの穴を射るをあたりとするなり、はま走り終れば、又一方よりまろばし返して各射るなり、はまをまろばす事は、射手の中より、

破魔弓